

書

架

大泉行雄教授の「商業 本質論」

室谷賢治郎

支那事變勃發以來經濟統制の擴大強化は商業機構の再編成を促し、商業理念そのものに關しても再檢討が加へられるに至つた。商業者の整理統合は必然的と見られ、營利本位の商業は公益優先の商業たらざるべからずといふことが一般に唱へられて來た。嘗ては過剰人口の吸収層としての商業が今や轉業者又は廢業者の温床であるかの如く考へられ、私利功名の獨壇場であつた職業が滅私報國の擔當者を以て任じなければなら

大泉行雄教授の「商業本質論」(室谷)

なくなつた。かくて速斷を敢てする者は、商人無用論を唱へ出し、商業の將來を否定し去らうとする。その影響は商業教育の上にも及び、義務教育を終へた兒童の中等學校へ志願するに際しての著しい減少率となつて示され、中等學校修業者の高等商業學校進學希望者の激減となつて現はれてゐる。明日の商業に對し輝しい前途を見出す者は極めて少くなつたといはなければなるまい。この時に當つて商業の本質を独自の立場から闡明しようとした書の贈られたことは、洵に意味深いとせねばならぬ。高松高商教授大泉行雄氏の近著「商業本質論」がそれである。左に聊かその所論を窺ひ愚見を陳ねて見たい。

大泉教授の立場或は考察態度は序文の中に明記せられる通り、第一に商業の本質を把握するため職能論的方法を採る。「その意味は商業の本質を國民經濟の全體における職能分擔として理解することを言ふ。」(序文、一頁。)職能の意味は全體關聯性を離れては把握せられぬものであり、従つて個體の活動が全體の關聯を成立

せしめるのでなく、全體關聯から個體の職能遂行の意味が與へられるのであるから、教授の考察に於ては「何よりも先に經營體としての商企業が存立を許さるべき全體が取上げられ、この全體關聯性のうちに商業の存立意味が捉へられるのである。」(序文、二頁。)逆言すれば商業本質の把握に當つて經營體の活動形式としての賣買・交換或は配給に出發點を求め、こゝから考察を進める方法は著者の態度ではない。何となれば實踐的な表現形式とその背後に在るものとは區別せねばならぬと考へられるからである。

次いで大泉教授の職能論的把握の意圖の裡には、商業概念を單純に歴史的範疇としてのみ理解せんとする傾向への批判が豫定せられてゐる。本質的なものは歴史性を超えて不易なものでなければならぬと見られるからである。「商業に關する現實問題の生起によつて俄かに商業概念の早急なる變更や改造も必要ではなくなるであらう。自由競争を中心とした經濟から、計畫や統制を中心とする經濟へ推移したとしても、商業本質は依然として存立するであらう。現實の問題はその時の形態が如何なる變貌をうけ、その時の職能實踐が

如何なる組織によつて遂行せられるかに存するにすぎぬ。」(序文、五頁。)

進んで著者の商業本質の把握の根柢には、國民經濟の有機的構成を可能ならしめるものが、とりもなほさず商業職能であること、従つて國民經濟の全體は商業經濟としてその本質を理解せねばならぬといふ態度が含まれてゐる。この意味に於て經濟の諸分野を農業・工業・商業と分つやうな機械的・平板的考察は著者から斥けられ、國民經濟を全體として立體的に理解する立場が採られるのである。

かくして本文を商業原理、人間生活と經濟、經濟生活の發達と商業、商業の本質、商業の分化、商業の經營、財貨の流通、國際商業の問題、商業における職分思想、商業統制の問題の十章に岐ち、著者は簡潔な敘述の筆を運ぶ。これ等の章のうち、著者が最も心を碎いたと思はれるのは、何よりも商業の本質を説いた第四章であらう。上に見られる著者の見解は茲でいとも具さに説明せられるのである。この章に關聯して、商業における職分思想を表明せられた第九章は特に注目し値する。私見を以てすれば第四章は商業の論理を明

かにしたものであり、第九章は商業の倫理を解いたものである。而も第九章に職分を説く著者の意圖たるや、「職能の主體的自覺」として職分を考へ、商業における當爲(倫理的要請)と本質(論理)との内面的な一貫性を主張せられるのである。(二四〇頁以下。)故に著者は明かに説く。「商業倫理の要請が現實に如何にして最もよく充足せらるゝかは、商業自體の論理の最も完き運營が存在せねばならぬからである。商業自體のうちに行はれる法則性・秩序性の把握は、とりもなほさず商業における論理の探求であり本質追求である。この商業そのものゝ本質的な在りかた、働きかたに従はずして商業における如何なる當爲も實踐することは許されぬのである。倫理と論理とがかくの如き内面的脈理をもつことにおいて理論又は原理の實踐性が認められる。」(二四二頁。)更にまた云ふ。「このやうな考察の究極において到達すべきところは、倫理と論理の合一であり、内容と形式の一體化に外ならぬ。ひとつのものゝ在り方・内面法則がそれだけとして切り離されては意味をもち得ずとすれば、表現形式は常に内容そのものゝ具現とつらなると理解せられねばならぬの

である。形式と内容はこのやうにして一體化され、相互依存の關係に立つ。」(二四四頁。)即ち著者大泉教授が商業本質の解明に當り形式的な表現に留まることを以て不十分とし、職能論的な把握を高調する境地はこの形式と内容との一體化に外ならぬのである。

尙ほ大泉教授は右の商業における職分思想を一般的に擴充して、故上田貞次郎博士の企業者職分に關する所説を援用し、併せてラスキンの「此の最後のものにも」"Unto this Last"のうち論ぜられた職業道を引用する用意を示してをられる。

三

大泉教授の商業本質の職能論的把握の方法は、その要旨右の如くである。在來の傾向として商業の意義を説くに際し、商業活動の單位たる企業の組織や構造に重點を置き、その分析に餘念の無かつたのに比べると、正しく對蹠的な立場に立つものである。これは個體の活動を全體の分肢と觀る所謂全體主義 Universalism の原理と一脈相通するところがあるやうに見える。固より大泉教授の著書の中には、直接には全體主

義とか、又はこの主張の代表オトマル・シュパン Othmar Spann とかに觸れた箇所を見出し得ない。兎もあれ事物の本質を實踐的な表現形式或は變化生滅する現象形態において捕捉せず、全體的な意味關聯において把握しようとする立場そのものは科學的に洗鍊を経た態度と稱せざるを得ない。

余は嘗て「商業史大綱」(昭和十二年)を公にした時、緒論に「商業の意義は卑見によれば商業の活動によつて理解せられる。別言すれば商業の本質は商業の職能から導出せられる。之を英語流に表現することが許されるとせば“Commerce is what commerce does”である」と述べた。いま大泉教授の著述を讀んで反省すると、余の當時の見解は大泉教授の主張と共通してゐる點もあるが、少々曖昧な箇所がある。正確を期するためには「商業の意義は傳統的には商業の活動によつて理解せられた。根本的には商業の本質は商業の職能から導出せられる」と改むべきであらう。大泉教授の示唆に感謝しなければならぬ。

商業における職分思想に關しては、これ亦期せずしてシュパンの全體主義的思想體系のうち極めて重要な

役割を演ずるのを聯想せしめる。抑も職分思想の源は東洋にあつては古代印度のウベニシャッドに、西洋にあつては古代希臘のプラトーンに見出される。降つて中世にはトマス・フォン・アキノ Thomas von Aquino に職分社會思想が跡付けられるし、近世に入つてからは獨逸觀念論の國家觀に職分思想が濃厚に現はれ、最近にはナチスの國家觀、ファシズムの社會觀に強烈に盛られてゐる。但し一口に職分思想と言つても、その意味するところは必ずしも一致してゐるのではない。それ故に茲に商業における職分思想が大泉教授によつて説かれても、これを以て直ちにシュパン流の職業協同體 Berufstand と同一視する輕率は嚴に戒めねばならぬ。何れにせよ階級から職分へ、詳言すれば鬭争を孕む階級制度から平和的秩序を保つて職分制度への要請は、歴史的範疇として考へる限り甚だ興味深く覺えるのである。

四

以上大泉教授の商業本質論に觸れて一二の私見を述べて見た。教授の本書の持つ特色は他にも幾多ある。

行論の飽くまで懇切を旨とし、専門學徒ならずとも容易に理解し得られるやう成つてゐる點なども見落すことは出来ない。「叙述の平明と魅力は教養書として完璧に近い。」と日本出版文化協會推薦之辭の中にもある。

因みに著者は半歳前に「現代商業の基本問題」といふ分量に於ては大ならざる姉妹篇を公にされ、商業と營利との關係、統制經濟下の商業を主に取扱はれた。この場合の力點は本質理論よりも寧ろ「緊急の原理」に置かれてゐる。即ち事態の緊迫さが常態的な選擇自由の餘さぬ必然性に顧て、商業問題を論ずるのである。一旦緩急あれば義勇公に奉ぜんがために、そのためにこそ愈々生命を惜しむ如く、時局が商業に再検討を要求しつゝある趣旨を、教授の所信として披瀝した好著である。

然も遡つて昭和六年夙に大泉教授の著書としては「商業原理講話」がある。商業の本質に關し教授が思索を深めらること年ありといふべく、一朝一夕の便乗の論議を公にしてゐるものでないことは知る人ぞ知るである。加へて昭和九年教授の奉職する高松高商の開校十周年記念に高松市に於ける小賣商及び卸賣商の

經濟實情調査を、大泉教授が同校の北條時重教授と八箇月を費して遂行發表せられた業績を回顧せねばならぬ。何れにせよ織る者は日を以て進み、耕す者も日を以て進むのである。學ぶ者亦日を以て進まぬことがあらうか。大泉教授の不斷の眞摯なる努力に敬意を表しつゝ、その商業本質論のレビューのペンを擱く。

(昭和十七年七月)